〔研究ノート〕

ラクナウと周辺に、南アジア・イスラームの多様性の一端を求めて

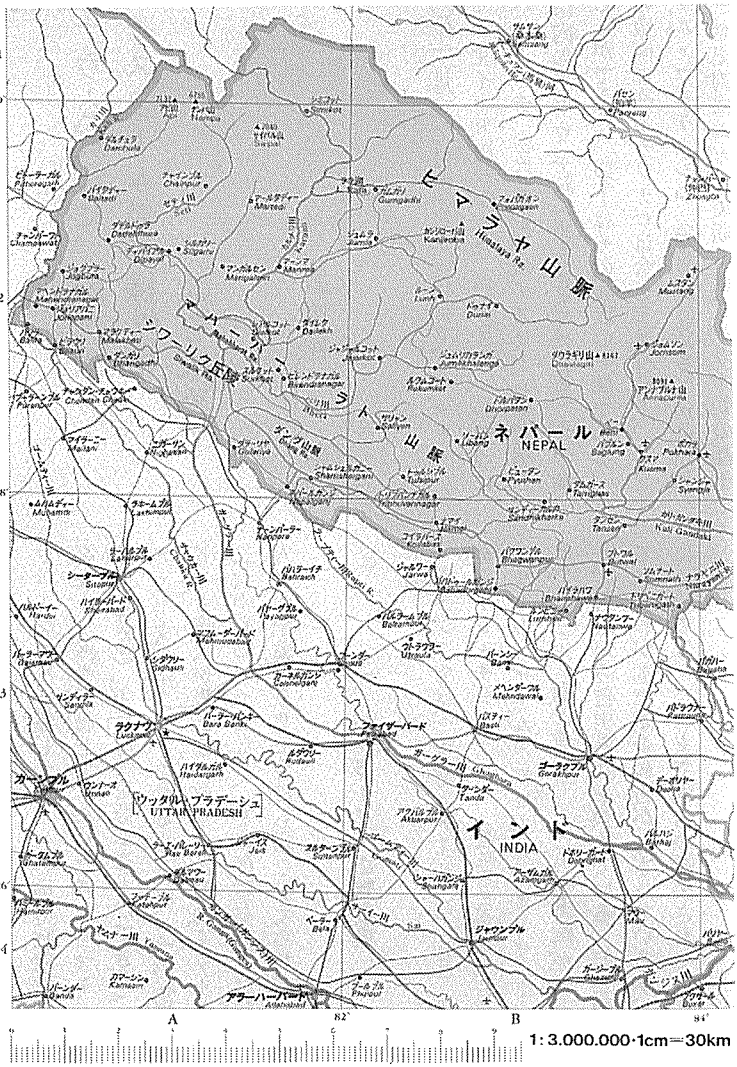
加賀谷　寛

二〇〇〇年三月二二日から三〇日まで、ニュー・デリー経由で、北インドのラクナウ（Lakhnau）を拠点にして、バハラーイチ（Bahrāich）のイスラーム聖者廟と、ラクナウ市内のナドワ学院（Nadvatu'l-'Ulamā）を予備調査することができた。以下はその報告の一部である。

デリーの東南に在るラクナウは今日では行政上、インドのウッタル・プラデーシュ（Uttar Pradesh）州の州都であるが、歴史的にムガル後期には、ムガル朝の都デリーの没落とともに、一八五六年イギリス東インド会社による併合まで、このアワド（Avadh）国を治めたナワーブの宮廷文化が繁栄した。ムガル朝はスンナ派ハナフィー学派を保護したが、この地方政権は一二イマーム系シーア派を保護して、今日に残るイマーム・バーラー（Imāmbāra）から往時を偲ぶことができる。さらにウルドゥー文学史にみられるように、その宮廷にはウルドゥー詩人が集まり、デリーと競ってウルドゥー文学の二大中心の一つとなり、その優雅な言語文化が称えられ、人々の記憶のうちに今日も語り伝えられている。

一、バハラーイチの聖者廟

南アジアでは、アジュメール（Ajmer）のムイーヌッディーン・チシュティー（Mu'īnud-'din Chishtī）廟と、デリーのニザームッディーン・オーリヤー（Nizāmu'd-din Auliyā）廟と並んで、この聖者廟がつとに有名であり、各地から善男善女を集めている。前二聖者廟については、わが国で調査報告がなされているが、[1]この聖者廟については、これまで報告が発表されていない。



［最新］ 地図で知る東南・南アジア（平凡社 2000 年）p. 68.

a　同廟の縁起

同廟に祀られる聖者は、インドへの侵入者として有名なガズナ朝スルターンのマハムードの甥、サーラール・マスウード（Sālār Mas'ūd）と伝えられている。通称、「ガーズィー・ミヤーン」（Ghāzī Miyān）に見られるように、異教徒の国（インド）への宗教的戦士（ガーズィー）とされている。その異称として、「殉教者の主」（Sayyid al-Shuhadā）、「殉教の太陽」（Āftāb-i Shahādat）、「正当な殉教者」（Shahīd-i bar-haqq）、「偉大な将軍」（Sālār-i a'ẓam）、などがあるが、イスラームの殉教者としてのイメージがそこに結びつけられていることが見られる。

史実は別として、この人物はイスラーム教徒の聖者信仰の対象となっただけでなく、同時に在地のヒンドゥー教徒からもそれ以上の尊崇を集めてきた事情がある。伝承では、彼は同地方の暴逆なヒンドゥーの王（Rājā Sahar Deo）の下で苦しむヒンドゥー領民たちを救い、住民を苦しめた王と戦って斃れたストーリーになっている。

さてこれらの多重の伝承に基づいて、聖者廟のプランが構成されている。

さて伝承では彼は巨人のヒンドゥー王と戦ったが多勢に無勢で戦死（イスラームでは「殉教」）した。彼の忠実な部下のスィカンダル・ディーワーナ（Sikandar Divānah）もその遺体を抱き上げたところを殺された。続いて、その遺体は忠実な愛馬と忠犬に護られた。最後にミール・イブラーヒーム（Mīr Ibrāhīm）の手で聖樹の許に埋葬されたが、このミール・イブラーヒームも戦死した、という次第である。

この事件のち、彼の聖者崇拝が起こり、ヒンドゥー教徒が熱心に崇拝するようになった。ヒンドゥーの牛乳搾り、ジャス・アヒール（Jasu Ahīr）には子がなかったので、彼の墓に祈願したところ、子が授ったために、新しく牛乳と石灰で墓を建てた、という伝承が加わった。また聖者没後一三年後に、盲目のイスラーム教徒の娘、ザフラー・ビービー（Zahrā Bibī）が聖者の墓で祈願したところ、祈願が通じて目が見えるようになり、精神的に結ばれて聖者の墓の近くに埋められた、と霊験記に伝えられている。(2)

b　バハラーイチへのルートと聖者廟建築

バハラーイチへの旅を、私はラクナウからのルートを

とることにした（地図参照）。鉄道とバスの交通手段があるが、ラクナウでの情報からはバスの路を勧められた。朝、ラクナウのバス基地に行ってみると、同地行きのバスが客を集めていたので、早速その乗客の一人となった。バスには時刻表がなく、どうやら乗客がある程度、集まったところで出発するようである（デラックスのバスもあると聞いたが）。インドによくある硬い狭い座席の乗り心地のよくないバスで、UP州東北部を目指して農村部を走り、一二八キロの巨離を三時間近くかけて、バハラーイチのバス停車場に着いた。目指す聖者廟は人混みの市内の商店街を通った先にあり、リキシャ（自転車式）に乗って市街を出て左斜めに折れて少し進んだところにあった。

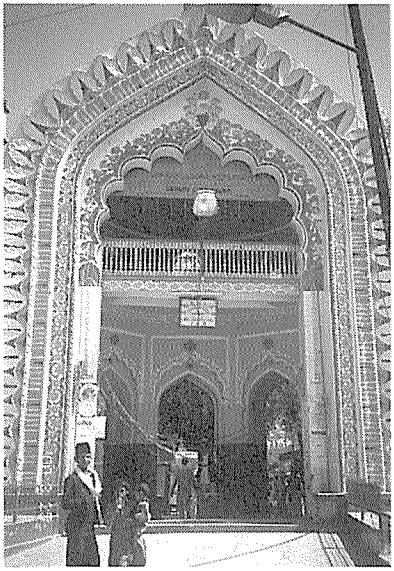
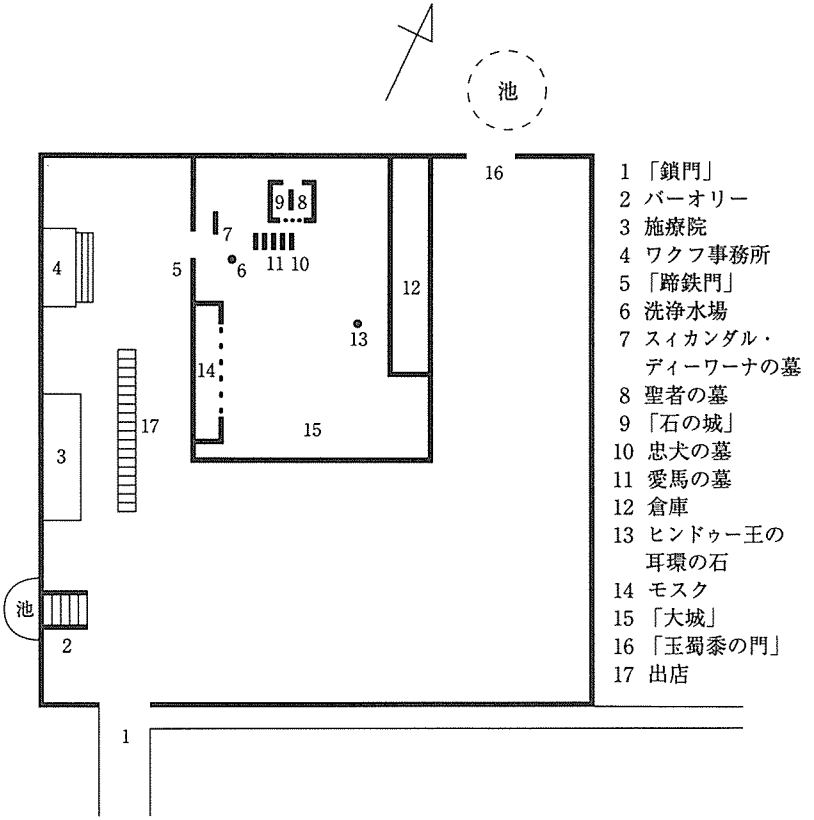


写真１　「鎖門」前面から

聖者廟のコンプレックスは、外廓、中廓、内廓の三部に別かれている（図一）。外部の俗界から聖者廟への入口は、「鎖の門」（Zanjirī Darvāza）と呼ばれ（写真1）、その名のとおり、鎖が形だけ低く渡してあり、参詣者は車馬を降りて鎖を跨いで聖域内に入らねばならない。門の付近には乞食が数人、参詣者を待って、しゃがんでいた。門を入って左手に、南アジアの多くの聖者廟にみられるように、階段で井戸や池の水面に降りられるバーオリー（bā'olī）の設備があるが、池は廃棄物がいたる所に浮いて、ひどく汚染されていて、今日では沐浴や儀礼的洗浄には利用できないが、かつては癒しの聖水であったと推定される（聖廟内の別の聖水施設については後述する）。さらに境内を進むと近代的施療院が左手にあり、聖者廟と、伝統的な聖水信仰の結びつきを暗示する。参道には参詣人のための露店が並んでおり、祈祷書、装身具、香水、聖緑布、花環、など聖者廟でのお供えに不可欠な用具が並べられて、南アジアのどこの聖者廟とも共通する風景を呈していた。



図一　バハラーチのサーラーレ・ガーズィー聖者廟（略図）

この日は平日なので、参詣人の数はまばらであった。さらに前方へ進むと、左手に聖者廟管理事務所がある（写真2）。これがUP州のワクフ局（Waqf Board）出張所と思われる。ちょうど、数人の書記と事務長のような人物が帖簿を記入しているところであった。たまたまそこに、若いフランス人の人類学者とその連れの女性がここで休んでおり、二人は同聖者廟の現地調査の目的で訪れているとのことであった。なお彼らはウルドゥー語が不十分のようであった。私もしばらくここに休んで一緒に話に加わっていた。私に対して事務長らしい男から、ここに泊まっていかないかと誘われたが、この話

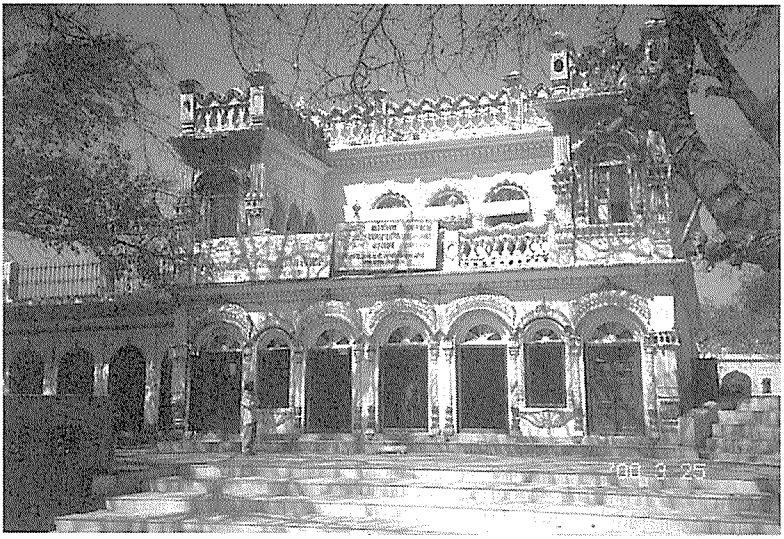


写真2　「ワクフ事務所」

から、ここには宿泊施設があり、われわれにも利用できることが確認できた。これは今後、同地を調査研究する日本人研究者にとって有益な現地情報として役立つであろう。フランス人の二人は滞在していく様子であったが、私は後日を期して廟内を一巡して急ぎ観察しただけで、同夕、ラクナウに戻った。

なおここで私を日本人とみた事務長の説明によると、当地の東方四〇キロに位置する重要な仏蹟、祇園精舎のあったサーヴァッティ（現、Sarvasti）とラクナウ間の道路は、日本からの援助で建設されたとのことであった。仏蹟巡礼者には先刻ご承知の情報であろうが、ここに附言しておきたい。

このとき眼前で一つのハプニングが起こった。突然、二人の中年婦人の間に烈しい争いが始まり、取っ組み合いになって共に前面の階段に倒れた。そのうち挑発者らしい精神異常者と思われる一人が恍惚となったスーフィー（神秘家）のように宗教歌を歌い始めて、やがて興奮が沈静していく展開を私たちは、ただ傍観していた。精神異常者（イスラーム神秘主義の用語では、majnūn, majdhūb などと呼ばれる）が聖者廟に見られるのは、いかにも聖者廟らしい風景で、予想できることであったが、

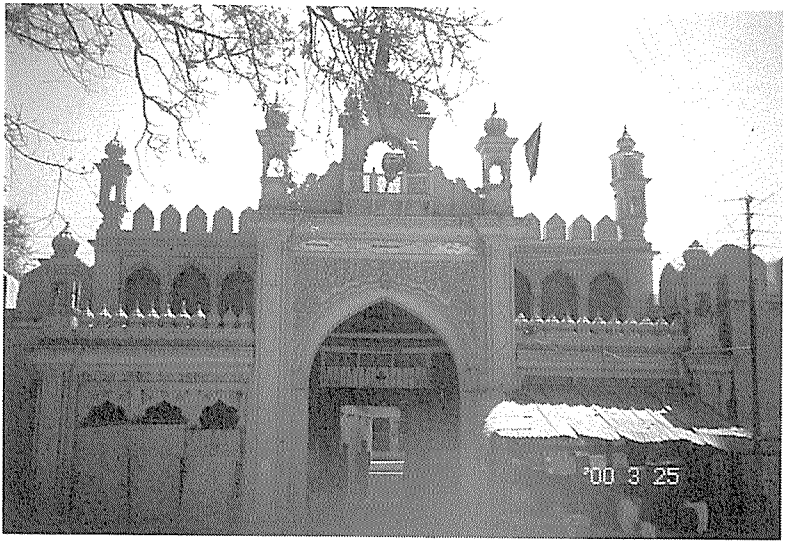


写真3　「蹄鉄門」

私はここでそれを現実に見ることができた。しかし事務所の人は、いつもの出来事として慌てた様子も見せなかった。

さて、この事務所まえに、聖者廟中廓の「大城」(Qila'-i Kalān) の入口、「蹄鉄門」(Darvāza-i Na'l) が西に面して開かれている（写真3）。この門はその名のように、木製の門枠に小型の蹄鉄をはじめ、多数のコインや金属が信心を表わすために埋め込まれている。蹄鉄は縁起（既出）に述べた聖者の愛馬への信仰から連想されたものと考えられる。

同門から入って左手の聖木の下に儀礼的な洗浄用水があり、参詣者はここで手足を洗浄してから詣でる。イスラーム聖者廟の三点セットとして一般に聖者の墓石、聖水、聖樹、の三つが見られるが、これらは神秘的な力 (barakāt) が宿っているという信仰があり、これはそれに基づいている。この聖水は、「殉教者たちの宝」(Ganj-i Shahidān) と呼ばれ、縁起に登場した殉教者たちの遺体を浸した井戸と伝えられて、神秘的な力の宿る聖水とみなされているものであろう。

ここから左手に回ると、縁起に現われた聖者の忠実な部下、スィカンダル・ディーワーナの墓があり、小さな

写真4　「石の城」ベランダ面

棒が十数本、供えられて吊されている。説明では、戦いのとき応援にかけつけた農民たちの武具ということであるが、私の目では、棒の先端が亀頭状になっており、男根の象徴のように見えた。この近くに、霊験記にあらわれたザフラー・ビービーの墓があるはずであるが、今回はそれを確認できなかった。

この先を右手に曲ると、この聖者廟の中心である「石の城」(Sangī Qila') の北の入口がある。この聖なる建物内部は聖者の墓石を中心に幅二メートル、長さ二・五メートル、高さ二・五メ拾トルで、壁は格子窓で、床石は黒と白の大理石が敷かれ、屋根には塔頂の飾りがある。三方に入口があり、南が正面入口であろう(写真4)。入口を持たない壁面は西面で、それ以外のどの入口からも出入りできるが、参詣者は墓石を中心に左廻りに儀礼的に廻り、墓石の足の所に、触って神秘的な厄除招福の力を貰い受ける。この廟の格子窓は、いうまでもなく願かけのしるしにぼろ布を結びつけるためのもので、ぼろ布が結びつけられているのを見ることができた。

また聖者の墓石には聖なる緑布が掛けられており、そのうえに花環が供えられているさまは、どの聖者廟にも見られるところである。聖墓の横には、世襲的な墓守り

(khādim) がおり、参詣者の願いごとを聞いて、それを祈願する役割を行なっていた。他にだれも人がいなかったならば、私も聖者に祈願をお願いしたい気持がなかったわけではないが。できうれば次回には、この墓室のなかで、墓守りと参詣者の宗教的行動を時間をかけて共感的に観察したいと私は願っている。

さて、この「石の城」の正面と考えられる西側ベランダ（写真4）に五基ほどの無銘の墓石が並んでいる。その一基は殉教者の軍旗持ち（nishān-bardār）のもので、それと並んで他の殉教者たちの墓があるが、特異なのは、それら人間の墓と同じ大きさで、縁起に現われた愛馬「青馬」（Asp-i Nīl）または「リッリー牝馬」（Lilli ghoṛi）と、忠犬（Sag Sangal）の墓石である。とくに犬はイスラーム教徒から嫌悪される穢れた動物であるにも拘らず、その墓が主人の殉教者にもっとも接近した位置に配置されていることは注目に価する。

さて「大城」の境内の東側には、倉庫か物置のような建物に、祭礼用の太鼓（daf, dafli）がいくつか置かれており、その横にシーア派のムハッラム月祭礼に登場するカルバラーのフサイン廟の模型（ta'aziyah）が一基、置かれていた。これはこの地方が伝統的にシーア派色の濃い土地柄であることを示している。

この境内の東南の土の上には、聖者と戦ったヒンドゥーの王の巨大な石の「耳環」（Kundal）が置かれている。これは聖者の敵が巨人であったことを示している。なおこの石を力士の体操用の石の根棒とする解釈もある。

この境内の西側には、ムガル朝シャー・ジャハーン帝の時代に築かれたといわれるモスクがあり、現在も西南方のキブラ（礼拝の方向）に向かって礼拝が行なわれている。聖者廟の境内にモスクが建てられる聖者廟・モスクのコンプレックスが、ここでも見出される。この前面にタマリンドの古木があり、この周辺に聖者の教友の「五聖者」（Panj Pīr）の墓がある。

境内にある一本の梅檀の木は聖木とみなされ、とくに女性の信仰を集めて、未婚女性には結婚の願いを、既婚の女性には子授けの願いを叶えると信じられ、彼女たちはここに金、銀糸や紐を結んで祈願すると言われている。

今回は見ることができなかったが、外廓の裏の「玉蜀黍の門」（Maka'ī Darvāzah）の両側には多くの休息所が設けられ、貯水池の周囲にはレプラ患者用の小屋が立ち並んでいると言われる。この聖者廟はレプラ患者を治癒する霊験が信じられてきたからである。(3)

c　聖者廟の祭礼

この聖者廟では、年に三度の祭礼が催される。一般に南アジアの聖者廟では、イスラーム暦（ヒジュラ暦）に従って聖者の命日がウルス（urs）と呼ばれて、聖者がこの世で死んで神と結婚した日として祝われる。この聖者廟は、このウルス年祭を、イスラーム暦ラジャブ月の一二、十三、十四の三日間に亘って行なわれ、ラジュビー（Rajbi）として知られる。主要な行事は、墓守りが聖者の遺物を収めた皿を頭上に行進した儀式で、今日ではこれが花と聖布に代えられている。またこの期間にはカッワーリー（聖者を賛える歌の演奏）と預言者を賛える詩会が催されるが、この二つは一般に南アジアの聖者廟のウルスには付随するものである。

このウルスの期間には、主としてイスラーム教徒が参詣に訪れる点に特色がある。

それに対して次の二つの祭りには、イスラーム教徒よりも、ヒンドゥー教徒、その他の非イスラーム教徒が独自の儀式を行ない、参詣に集まると言われる。[4]

その一つは、「春祭り」（Basant Fair）で、ヒンドゥー暦のマーグ月三日に行われる。このとき、地元と近隣からイスラーム教と非イスラーム教徒を問わず、各種宗教の信者が参集する。春を表す黄色の衣服を着けた農民が小麦の緑の穂、果物、花などを手に持って集団で参拝し、聖者に収獲を祈願する。

つぎが「ジェーシュト月の祭」（Jeshth Mela）で、ヒンドゥーの暦のジェーシュト月の最初の木曜のあとの日曜に始まる最大の祭りである。これは約十二日間続き、遠方からも多くの参詣者が集まる。彼ら参詣者は地方別に割り当てられたキャンプ場に宿営し、総数五〇万人に達すると言われている。このため北インド各地の交通機関はバハラーイチを目指す参詣者で混雑する。この時期を目指して露店商が集まり、市（mela）が立つ。

祭りの主役は、霊験の伝承に登場するザハラー・ビービーである。聖者廟内の彼女の墓には、未婚のまま亡くなった彼女が、同じく未婚で死んだ聖者と結婚した日と信じられ、彼女の出身地の人々が代々、結婚行列（barāt）を模して参列する。そのため彼女の出身地（Rud-dali）の町民の代表がこの役を務めるようになっている。彼らが花嫁の持参金（jahez）を持参し、二人の墓に供える儀式を行なう。この儀礼的聖婚の品は、新婚のベット、家具、調度品、宝石、現金、から成っている。

また主要な行事に、参詣者が持参する、先が尖った杖

(nishān または 'alam) があり、布で包まれている。この杖を「石の城」に触れて、参詣者は各自の願いごとを念ずる。この行事の起源は、聖者が暴逆なヒンドゥーの王と戦っているのを知って、聖者の徳を慕う住民たちが、聖者の戦いに加勢するため、この杖をもって馳せ参じた故事にあると伝えられている。

またこれとならんで行なわれる儀式に、「石の城」のドームの尖端の飾りを目がけて、お賽銭を投げ、これがその飾りに的中すれば願いごとが叶うという信仰である。

この「ジェーシュト月祭」はイスラーム教徒だけの祭り以上に、伝統的に北インド広域にわたる重要な祭りの位置を占めている。

今回の予備調査では不可能であったが、この聖者廟の本格的調査のためには、これら年三度の祭りの時期に合わせて現地を訪れることが是非とも必要であろう。

これまで年祭という行事について述べたが、参詣者で賑う日には、イスラーム暦に基づく二度の「イード」(id) の日、シーア派の祭りの「アーシューラー」の日、そして「シャベ・バラート」(Shab-i Barāt) があり、いずれもイスラームの祭りの日であり、イスラーム教徒が主として参詣すると考えられる。

さらに各週では、木曜夕と日曜に参詣者が多く集まる。木曜夕はイスラーム教徒の宗教行事の日であり、日曜日は非イスラーム教徒が主として参詣すると推察することができる。残念ながら今回の廟訪問は平日であり、これらのいずれでもなかった。

d　この聖者廟の性格をめぐって

南アジアの今日の主要な聖者廟として、はじめにデリーのニザームッディーン・アウリヤー廟とアジュメールのムイーヌッディーン・チシュティー廟とこの聖者廟を挙げた。この三聖廟を比較するとき、前二者が南アジアで有力なチシュティー教団 (Silsilah-i Chishtiya) のスーフィー聖者 (Shaikh, Pir) の廟であり、'established' された正規の教団に属するのに対して、この廟は既成のスーフィー教団の系統に属していない不正規な性格が注目される。祀られる聖者は本来のスーフィー聖者でなく、異教徒の王と戦ったと伝えられる殉教者である。またこの聖者廟の参詣者にはイスラーム教徒だけでなく、ヒンドゥー教徒も大幅に含んでおり、この点についてはイスラーム暦とヒンドゥーの暦の二本に基づいて祭りが行なわれていることに示されるであろう。

さらに社会から見棄てられた癩病患者と社会の最底辺の大道芸人の信仰を伝統的に集めてきた点も注目される。これらの点は、厳格なイスラーム教徒の目から見るとき、「異教的」性格を示すものであろう。さらにその施設と祭礼を今後、検討することによって、その重層的な宗教的な宗教的性格の全体像が浮かび上ってくると考えられる。この民衆的な聖者廟信仰の内面には、イスラーム的要素とヒンドゥー的要素が融合した情報が豊富に隠されていることは間違いないであろう。

二、ナドワ学院の近況

現代南アジアにおけるスンナ派ハナフィー法学派のイスラーム学院（madrasah, dār al-'ulūm）としては、伝統的で改革派の影響も受けているデーオバンド学院をこれまで代表的な存在と私もみなしてきた。それほどこの学院の存在については、注目を集めることが少なかったと言わなければならない。

そもそもこの学院は近代におけるイスラーム教徒の教育をめぐる「伝統派」（qadīm）と「近代派」（jadīd）との綜合を目指して一八九四年、建学されたが、この建学の意図が結局、中途半端に陥り、建学に参与した学者シブリー（Shibli Ni'mānī. 一九一四年没）の高弟、スライマーン・ナドヴィー（Sulaimān Nadvī 一九五三年没）の独善的で硬直的な学風が厳しく批判され、[5] 私も半世紀以上まえのこの批判を受け入れてきた。

しかし今回、州立ラクナウ大学キャンパスに隣接するこのナドワ学院を初訪問することができて、同学院に対する私の消極的な観方は一変したと言ってよい。同学院は今日、学院生数、三〇〇〇人以上が学んでおり、学舎増設も目覚ましく、近年顕著な発展ぶりを示しているのを見ることができた。

また現学院長のムハンマド・ラービゥ・ハサニー師（Saulānā Sayyid Muḥammad Rābi' Ḥasanī Nadvī）と同学院付属モスク内でインタヴューすることができた。なお前学長のアブル・ハサン・アリー師（Abū'l Ḥasan 'Alī Nadvī）は、名著 *Islam and the World*（一九五〇年アラビア語初版、一九六一年英訳版）をはじめ多くの活発な著作活動で、イスラーム世界に広く知られている。前学長はアラビア語教育に重点をおき、アラブ諸国との文化交流に熱心で、一九八五年に設立された「イスラーム文学連盟」（Rābita Adab al-Islāmī）に加盟し、アラブ諸国

との太いパイプを持っていた。

なおこの学院は自分の財源を持ち、学院生の授業料は無料で、さらに大部分の学院生には寄宿舎費、食費が支給されているため、経済的に恵まれない家庭の子弟も集まるものと考えられる。

私のため、付属モスク、付属図書館、研究出版部、宗教学部、アラビア語学部、付属食堂、医務室、など学院施設を案内いただいた。付属図書館は古写本をはじめ図書が充実しているとの説明があった。

また現代に生活するイスラーム教徒の要請に応えるために、宗教法の権威が信徒の法解釈に関する質問に答える「教令部」(Dār al-Fatvā) が学院創立以来、活動を続けており、また近年、イスラーム法（主として民事関係でなかろうか）で裁定を行なうために「法裁定部」(Dār al-Qada) が設立され法的活動を開始している。

このように現代イスラーム世界との密接なつながりをもつ南アジア内の主要なイスラーム神学校の一つとして本学院の現状を紹介した。

エピローグ

私は今年で現職を退くことになる。編集者から私のこれまでの研究の回顧をと依頼されたが、現在の私の研究分野の一つがスーフィズムの思想・儀礼・組織であり、本研究ノートをそれに関連した現地調査報告として私は位置づけたい。幸い日本における学界でも同分野の調査研究が、南アジアのみならず東南アジアから北アフリカにわたるイスラーム世界諸地域で最近推進されている傾向にあり、慶ばしい限りである。今後その発展を期待するものである。

さてラクナウからの帰途にニュー・デリーを経由したが、その有名な聖者廟、ニザームッディーン・アウリヤー廟を訪れることができた。他の参詣者と同様に花環を、一つは聖者の廟に、他は隣接する「インドのおうむ」と称されるペルシア語詩人アミール・ホスロー（一三二五年没）の墓に供えた。そのとき境内で会った自称、聖者の後継者 (Sajjādah nishīn) のグラームスィブタイン・ニザーミー (Sayyid Ghulām Sibṭain Niẓāmī) から約束どおり、今年度の聖者年忌祭（ウルス）の案内状が遅れてこのほど私に送られてきた。それにはイスラーム暦による年忌の案内とともに西暦換算で二、〇〇〇年は七月一九—二三日の期間)、願いごとにともなう寄付をも求める内容であった。その寄付の使途として、「参詣者

のための炊き出し」(langar)「供物」(nadhr-o niyāz)「灯明」(roshnī)「お花」(phūl)「聖布」(chādar)が挙げられていた。また信者からの願いごとの内容としては、「健康、信仰、長寿、出世」があった。古稀を迎えて、このうちの何を願うか、私は迷っているところである。

注

(1) 鈴木斌「ニザームッディーン・オーリヤ廟での宗教集会に就て」(『東洋文化研究所紀要』第五十九冊、昭和四十八年二月)。鈴木斌「ムィーヌッディーン・チシュティー廟に就て」(『東洋文化研究所紀要』第六十九冊、昭和五十一年三月)。

(2) 聖者の伝承については、Tahir Mahmood, "The Dargāh of Sayyid Salar Mas'ud Ghazi in Bahraich: Legend, Tradition and Reality", in Christian W. Troll(ed.), *Muslim Shrines in India*, Delhi 1989. に基づく。

(3) 聖者廟の建物群についても、注(2)についても、注(2)の文献に依拠した。

(4) 祭礼についても、注(2)の文献を参照した。

(5) Shaykh Muḥammad Ikrām, *Mawj-i Kauthar*, Firūzsons, n. d.